

彙 報

西南アジア研究会会報・その他

- 本会例会——第2回：10月17日午後2時，於天理大学若江の家，中村満次郎氏「今日のエジプト」。第3回：11月28日午後2時，於京大文学部新館地理学実習室，岸本通夫氏「バリのアジア学会に出席して」。(両回共，日本オリエント学会関西支部と共催)
- 京都大学第5次イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊——水野清一教授の7月初旬出発につき桑山・小谷・樋口・末尾・応地・吉田・足利・田村・恵谷諸氏が相次いで現地に向われた。会員消息の各氏の項参照。○京都大学東南アジア研究センター——吉田・西田・棚瀬・藤吉・足利・日比野諸氏の動静は会員消息欄参照。同センターの「東南アジア研究」は第4号(6月末発行)につづいて第2巻第1号(9月30日)が発行された。同第2号は本年末の予定。
- 京都大学内陸アジア研究施設羽田記念館は故京大長官羽田亨博士の遺志を実現するものとして三島海雲氏(カルピス食品工業社長)の寄付金1千万円を基金に，武田長兵衛氏(武田薬品工業社長)の寄付金5百万円，それに羽田家の好意による土地約400m²の譲渡をうけて京都市北区大宮田尻町に11月着工，昭和40年4月13日開館式挙行の予定。基金の成立は昭和37年のことで，田村実造・羽田明両教授並びに文学部長足利惇氏教授の御幹旋があった。
- 日本オリエント学会——第6回学術大会は東大教養学部にて10月31日・11月1日の両日開催。宮崎市定氏の公開講演，大島清氏の発掘調査(下記参照)報告，小野山節・吉川守・小川英雄・加賀谷寛・井本英一ほか諸氏の研究発表が行なわれた。また「オリエント」Vol. VII, No. 1は8月15日(伊藤義教ほか諸氏の論文等)，No. 2は10月30日(伊藤義教・足利惇氏ほか諸氏の論文等)に発行された。

会 員 消 息

- 山口恵照氏(阪大文学部教授)著「サーンキヤ哲学体系序説」は3月末発行(あぼろん社)。
- 足利惇氏(京大文学部教授・本会会長)は5月9日満63歳の誕生日を迎えられ本学年度の終了と共に退官される。その記念事業会は11月30日付を以て趣意書を発送，1口(500円)以上の献金募集を開始，締切は昭和40年3月末とし，同氏に記念品を贈呈するほか，諸種の事業をも予定，西南アジア研究会もその助成対象とされており，また御退官記念パーティは昭和40年5月9日午後2時半～4時半，京都ホテルにて開催される。なお会長は9月10日羽田発「イランにおける文献・方言の研究調査並びに資料蒐集及びタイ国における宗教と生活について調査」の上12月8日帰国された。そのイラン御滞在中の動静の一端をお伝えするため，編集子宛の「イランからの書簡Ⅰ～Ⅲ」を披露したい。……は編集子による省略，()は同補筆を示す。この披露については「あとがき」p.

彙 報

161 をも参照願いたい。(書簡Ⅰ：9月24日付)前略 テヘランに安着してより十日を経申候。いよいよメヘルの月に入り高台の秋は頼みに深きを覚え申候。趣から云えば卅年以前に及び不申候も人の心は不変、シャファグ氏とも会い今日同氏の家へ招待を受け候。ギルシュマン氏とも久々にて言葉をかわし申候。二三日中には国内の旅に上る可く暫らく首都(テヘラン)を離れ申候。御健康祈上候。／(書簡Ⅱ：10月22日付)前略……「西南アジア研究」につき種々御配慮難有御礼申上候。当方無事、イラン高原の秋気頼みに爽やかと相成り昨廿一日は仲秋の名月を一点の雲もなき天空に仰ぎ申候。本月十日より約十日間西南方イランの旅行に出で申候。卅年以前には夢にも思わざりし坦々たるアスファルト道路と新道の開鑿にて疲労も比較的少なく、途中未完成の個所も所々は御座候えども今後五六年もすればイランの旅も一層快適を加えることと被存候。イスハハンのメイダンも昔にかわって整備され、やや趣を減少せし難いは有之候もやはり落つきたる都市の感深く、あたかも京都に帰りたる心地致候。ムルガープでは例のキュロスの墓を訪れ、かつて見落したる遺跡を炎天下二時間程見学仕候。ペルセポリスもヘルツフェルト及びシュミットの手にて深く掘り下げられ、すっかり清掃せられ居候は感心。かつて一軒の家もなかりし石階段の前にも家やホテルが出来居るにもびっくり致候。ナクシュロスタムのダリウスの墳墓には螺旋形階段にて上ることが出来、又、例の俗称カアバという祭壇の下も深く掘下げられ、御承知のパールシーク以下三体の碑銘も肉眼で見ることが出来、感激仕候。この碑文を保護するため、わざわざ立かけの屋根が造られ、薄暗く写真撮影には困難を感じ申候。シーラーズよりアフワーズに到る道路は小生始めてにて、途中ギルシュマン教授の「ササン王朝のバルサイユ宮殿」と云われるシャープールの遺跡を見、規模の広大なるに一驚仕候。フジスタンでは同教授の仕事たりしチョガーゼンビールを見、更にスーサの遺跡を卅年ぶりに見学、これもかつての悪路との戦を想い感慨無量のもの有之候。路は北上してブルジルドより、ササン王朝最後の決戦場たりしネハーバンドに行し、同地南方のギアンの先史時代の遺跡を訪れ得たるは望外の喜びに御座候。クルヂスターンの中心、ケルマンシャーよりは例のターキプスタン、是も面目一新、公園の如き感じ有之候。ピストーンは昔の如くに御座候も、新道路開鑿のために出土せる石像を見ることを得申候。カンガバルではアナーヒター女神神殿の跡、石柱のころげ居る丘を右往左往致しただ *diana persica* の名声西方に聞えしも当然の事と思われ申候。ハマダンを経て廿一日テヘランに帰着……仕候。／(書簡Ⅲ：11月7日付)前略、過日西南イラン旅行の後、十月廿七日当地(テヘラン)発タブリーズに向い申候。この方面も卅年以前に訪問せしこと有之、途中、ザンジャンに一泊、二日ばかりに御座候しも此度はイランの鉄道を利用し午後二時半当地発、翌朝八時半タブリーズ着、殆んど旧道に沿い走り居候もタブリーズに近く鉄路は迂回して、レザイエ湖の東岸沿いになり居るが相違致居候。タブリーズも新道路が出来、中心は昔の倅無之候。有名なるブルーモスケも整理復元され、かつての半壊のモンゴル時代の城壁も附近に公園の如くなり居り候。タブリーズは古き街なるにかかわらず、再度の兵禍と地震にて破壊せられ、今日にては古き見るべきもの少なく存候。卅日(十月)テヘラン帰着、三四日の后、本月(十一月)三

日メシェッドに向い申候。これもかつて小生がフェルドウシイ千年祭に國家より招待を受け、途中シャールード、サブゼパール、メシェッドに夜を過しつつトゥスに行き候行路は、今度はこれも鉄路を利用、三日夜七時当地（テヘラン）発、翌日十時半、ニシャプールに下車、ハイヤームの墓を二度目の墓参仕候。墓もかつての位置と異なり、すっかり趣を変え、整理せられ居るは驚き申候。ニシャプールの発掘品の出ずる場所に、博物館の親切なる吏員の案内を受け申候。午后、バスにて夕方メシェッドに入り申候。メシェッドの街もすっかり改められ、イマーム・レザーの聖地にはネオンのランプつき、また拡声器にて朝の祈りの呼声も全市に響き渡るには、近代とは申せ、以前を知るものには唯々驚きの一語に尽き申候。翌日（五日）、博物館、バザール、又、フェルドウシイの墓をトゥスに訪ね申候。行く道はアスファルト道路にて快適、墓は先帝レザ・シャーがテープを切りし当時のものと少しも不変、丁度満卅年にしてこの地に來りしは感激の極みに御座候。当時同行せし世界の学者の大半は既に死亡し、イラン学も新たなる展開をなすべき時機を痛感致候。更に翌六日夕、メシェッド出発の午前申を利用してモンゴル時の遺跡のある約八十五キロ離れたるラデカンを訪ね申候も、遺跡と云うべきものも見当らず、農夫は畑を耕し、羊の群れを見る平和なる景観にて、故事を聞えども知らず、そのまま引きかえし、夕五時半の急行にて本日（十一月七日）正午首都（テヘラン）に帰着致候。急ぎの旅にて、詳細は帰朝の時にゆずり可申候。先ずは近況御報告迄。——こののち書簡Ⅳ（11月19日付）を出状され、11月26日テヘラン発バンコクに向かわれた。○梅棹忠夫氏（大阪市大理学部助教授）の「東南アジア紀行」は5月末発行された（中央公論社）。○吉田光邦氏（京大人文科研助教授）は6月末帰国（本誌前号参照）後、8月2日羽田発イラン・アフガニスタン・パキスタンにて“西アジア地域における人類学に関する研究調査並びに資料蒐集”の上昭和40年1月21日帰国される予定。○西田龍雄氏（京大文学部助教授）の「西夏語の研究」上巻は6月末発行（座右宝刊行会）。なお同氏は“北部タイにおける諸言語の調査”のため9月1日羽田発タイへ。帰国は昭和40年2月27日の予定。○石川栄吉氏（神戸大学文学部助教授）（杉之原寿一氏と共著）の「南太平洋」は7月1日発行（保育社カラーブック63）。○水野清一氏（京大人文科研助教授）は“西南アジア地域における考古学に関する研究調査並びに資料蒐集”のため7月3日羽田発京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の現地へ。帰国は12月24日の予定。桑山正進・小谷仲男両氏（共に京大大学院文学研究科）も行を共にされた。なお、水野清一氏（吉川逸治外語氏と共著）の「アフガニスタン古代美術」は11月14日発行（日本経済新聞社）。○岩村忍氏（京大人文科研助教授・京大東南アジア研究センター所長）は7月4日羽田発ソ連・ハンガリー・チェコスロバキア・オーストリア・イランを経て8月8日帰国された。“遊牧民に関する歴史的、現代的研究調査”並びにウィーンで開催（7月16～26日）の“遊牧民に関する国際シンポジウム”に出席のため。同氏の「暗殺者教国」は8月30日発行（筑摩書房グリーンベルトシリーズ）。○中村満次郎氏（天理大学おやきと研究所員）は2ヶ年のカイロ大学留学を終えて7月5日帰国された。○樋口隆康氏（京大文学部助教授）は7月8日羽田発、地域・目

彙 報

的は水野清一教授と同一で12月24日帰国される予定。○大島清氏(東大文学部教授)は日本オリエント学会派遣の西アジア文化遺跡発掘調査団に団長として参加、一行と共に7月9日羽田発イスラエルへ。テル・ゼロールの発掘調査に従事の上9月13日に帰国された。○末尾至行(奈良女子大文学部助教授)・応地利明(名古屋大文学部助手)両氏は7月26日羽田発、アフガニスタンKunduz 周辺及びイラン Tehran 周辺の農村調査の上昭和40年1月上旬帰国される予定。○上野照夫氏(京大教養部教授)の「インドの美術」は7月末発行(中央公論美術出版)、同氏は本書により11月3日第19回毎日出版文化賞を受賞された。○上岡弘二氏(京大大学院文学研究科博士課程)はペンシルヴェニア大学の奨学資金によって8月7日羽田発、同大学に留学一年の予定。○岸本通夫氏(大阪市大助教授)は8月16日帰国された(本誌前号参照)。○藤枝晃氏(京大人文科研教授)は9月6日発、敦煌出土写本の調査のためソ連・英・仏・西独・インドを歴訪後12月10日羽田に帰着された。○田村実造氏(京大文学部教授)は足利教授と同道、9月10日羽田発イランへ。“イラン国における諸遺跡の研究調査およびイル・カーン時代のバルシア文献の調査蒐集”の上11月26日帰国された。○恵谷俊之氏(京大文学部講師)も田村教授に同行されたが、帰途はニュー・デリーを経て11月29日帰国された。○棚瀬襄爾氏(京大文学部助教授)9月28日帰国された(本誌前号参照)氏は12月10日午前9時狭心症のため急逝された。謹んで御哀悼申し上げる。○森鹿三氏(京大人文科研教授・同所長)は訪中學術代表団員として10月6日羽田発、“中華人民共和国の研究機関視察および資料蒐集”の上10月末帰国された。○中山正善氏(天理教真柱)は11月3日藍綬褒章を受章された。○高木雅子氏(東大大学院修士課程)は11月12日羽田発ローマへ。イタリア政府留学生としてローマ大学で考古学研究のため(滞伊予定は8ヶ月)。○藤吉慈海氏(京大人文科研研究員)は11月12日羽田発“東南アジアにおける仏教教団の実体調査”のためタイ・ビルマ・カンボジア・南ベトナム・中華民国歴訪後昭和40年3月13日帰国される予定。○大地原豊氏(京大文学部助教授)は読売新聞・CNRS 日仏科学者交換計画により“サンスクリット土着文法学の原典研究”のため11月16日羽田発パリへ。滞仏半年、昭和40年5月15日帰国される予定。○平島成望氏(アジア経済研究所調査研究部東アジア室)は11月24日羽田発パキスタンへ。“同国における農業機械化の進展”を2ヶ月間現地調査の上昭和40年1月22日帰国される予定。○長尾雅人氏(京大文学部教授)の「MADHYĀNTAVIBHĀGA-BHĀṢYA. A Buddhist Philosophical Treatise, ed. for the First Time from a Sanskrit Manuscript」は12月10日発行された(鈴木學術財団)。○日比野丈夫氏(京大人文科研助教授)は12月22日～昭和40年3月15日の予定で“東南アジアにおける華僑の歴史的社会的研究調査”のため、中華民国・香港・マカオ・ベトナム・カンボジア・マレーシア・インドネシアへ出張される。○織田武雄氏から5,000円、伊藤義教・井本英一両氏からそれぞれ10,000円、岩村忍・藪内清両氏からそれぞれ1,500円、吉田光邦氏から2,000円(以上氏名次第不同)、本特集号出版資金として寄託された。